

外国人の人権尊重に関する実践事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

愛媛県西予市

○学校名

西予市立多田小学校

○学校のURL

<http://tada-e.esnet.ed.jp/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年各1学級、【特別支援学級】2学級、【合計】8学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】65人（平成28年11月25日現在）
（内訳：1年生10人、2年生13人、3年生15人、4年生13人、5年生5人、6年生9人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

記載事項なし

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

「ふるさとを愛し、心豊かにたくましく生きる多田の子どもを育てる」

【人権教育に関する目標】

（基本目標）「同和問題をはじめとする様々な人権問題の解決のための力を育てる」

（重点目標）（低学年）

- ・助け合い、励まし合う学級づくり
- ・誰とでも仲よく遊び、頑張り合う仲間づくり
- ・生活の中で差別に気づく子どもの育成

（中学年）

- ・支え合い、何でも話せる学級づくり
- ・間違いに気づくことのできる仲間づくり
- ・差別を見ぬく子どもの育成

（高学年）

- ・一人一人の立場を理解する学級づくり
- ・差別を許さない仲間づくり
- ・不合理、矛盾、差別を仲間とともに解消する子どもの育成

○人権教育に係る取組一口メモ

自己実現への支援と児童相互の高め合いを通じて、人権尊重を基盤とした生活態度と様々な人権問題解決への実践力を育成する。

○人権教育に係る取組の全体概要

- 授業づくり
 - ・人権・同和教育の視点を明確にした事業実践
 - ・一人一人の子供の願いが活かされる授業

- ・同和問題をはじめとする様々な人権問題の解決につながる指導内容と指導の工夫
- 集団づくり
 - ・すべての子供が喜びをもって学級生活や学校生活を送ることのできる集団づくり
 - ・一人の喜びを共に喜び、一人の悩みを共に解決しようとする仲間づくり
- 地域づくり
 - ・保育園との連携強化
 - ・小中学校の連携による進路保障
 - ・校区別人権・同和教育懇談会の開催
 - ・同和問題学習会や研修会への自主的参加

3. 実践事例の内容

◆ 「へんろノート」の差別落書きについて考える

(取組のねらい、目的)

本校児童は全体的に穏やかで素直な児童が多いが、小集団の慣れ合いや甘えから、積極的に自分の思いを伝えたり、「自分がやらねば」という強い気持ちで行動したりできる児童は少ない。そこで、このような児童に身近な出来事を題材として学習させれば、より実践的な行動力が身に付くのではないかと考えた。

(取組を始めたきっかけ)

平成24年3月、四国八十八ヶ所霊場の途上にある休憩等ができる「へんろ小屋」に置かれている誰でも自由にメッセージが残せるノート（「へんろノート」）に外国人差別に関する記述が見付かった。当時の新聞やテレビ報道でも、似たような書き込みや貼り紙が四国各県で見付かっており、人権問題として取り上げられた。

(取組の内容)

校区内にある「へんろ小屋」を題材とした授業を試みた。

まず、実際にあった差別落書きを教材化するため、市役所を訪問した。資料を扱う際の個人情報保護など、注意を要することなどを確認した。また、

「へんろ小屋」を建設した責任者の方にも教材化の承諾を得るため、直接会った。「遍路文化を子どもたちに引き継いでもらいたい」「地域の方とお遍路さんの交流の場にしたい」という話を聞き、改めて差別落書きはこのように思

いを踏みにじる行為だと実感した。

授業の内容については、導入でこの「へんろ小屋」には多田小学校の児童作品が展示されており、ここを利用されたお遍路さんが多田小学校の児童に向けて、



多くの感謝のメッセージを残していることを知らせた。そして、「へんろ小屋」に置かれている「へんろノート」に見逃してはならない表現があったことを説明した。授業の展開では、差別の対象となった外国人女性に焦点を当て、その人の思いや考えに共感しながら学習を進めるようにした。中心発問は、差別を解消するために作ろうとした「友情のへんろ小屋」が、新たな差別（中傷）の対象となり、建設中止を求める動きに「自分ならどう対処しますか」というものにした。

(取組の主体や実施体制)

人権・同和教育主任を中心に4年生以上を対象にした授業を実施し、学校としての取組となっている。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

(課題、課題が生じた背景)

資料で取り上げた「外国人に対する差別落書き」については、偏見に基づいた表現を使用した落書きのことで捉えているが、その特定の外国人に対する差別的表現をどのように知らせ、理解させたらよいか課題となった。

(課題に対する対応)

歴史的な時代背景や政治的な社会情勢の変化（領土問題など）をどこまで説明したらよいか悩んだが、授業中の児童の視点（意見）は、人に不愉快な思いをさせる表現があることが差別だということであり、教師が難しく考える必要はなかった。しかし、この特定の外国人に対する差別的な表現については、社会科の授業でも再び学習する必要があると考えている。

5. 実践事例の実績、実施による効果

(取組が効果を上げた実際の事例)

差別落書きの授業を行った数日後、授業を受けた児童から「学校の外壁に落書きを見つけた」との連絡があり、6年生の児童で外壁の掃除に取り組んだ。更に6年生の児童から「落書きがあった壁以外（周囲の壁や内側の壁）もきれいにしたい」との声があがり、3年生～6年生の児童も壁の掃除を行った。白くなった壁を見て、「気持ちがいい」「うれしい」などの意見が聞かれた。

また、「へんろ小屋」を掃除に行ったあとの6年生の感想文の中に、差別落書きがあったノートを見つけて、その後差別落書きが書かれていないか見たという意見やちょっと気になる書き込みを見つけて、改めて授業の内容を振り返ったという感想が見られた。特に、これからもお遍路さんに気持ちよく休んでもらうためには、細めに掃除をする必要があることに気付いたり、自分たちの作品を小屋に掲示することに意味を見いだしたりする児童も出てきたことは、今回の取組の成果である。

(取組の実施から得られた知見・経験により改善を図った事項)

授業でお遍路さんを扱ったことにより、地元につながる無数の無縁仏と7つの遍路墓についても教材化を図った。一つの遍路墓は「佐渡巡礼の墓」と呼ばれており、説明看板には、明治38年頃親子で遍路をしていた娘さんが重い病に侵され亡くなった。地元の人物が手厚く葬り、昭和初期まで供養を行っていたというものであった。また、その父が佐渡に帰ってからも長い間お礼の手紙を送ってきたと

いう伝承も残っていた。この出来事から、先人が世話を続けてきた遍路墓を通して、その親切な行為が時や場所を超えて多くの人々の心を温かくしていることを知り、人を思いやることの大切さを感じてほしいと思い、教材化することにした。まず、佐渡市役所にお遍路さんが実在した人物なのかを確認したところ、現在もその姓が残っていることが分かった。佐渡市役所の職員からは「100年前の御恩について、佐渡人としてお礼申し上げます」というFAXが届いた。さらに、お遍路さんを手厚く葬った子孫の方からも話を聞き、教材化の了承を得るとともに、長年、そのお墓を守っていたことも分かった。児童の感想には、「佐渡の人々はみんな家族なんだと思った」とあり、改めて佐渡市役所の方との連携が児童たちの心に響いたことを確信できた。その後、佐渡のお遍路さんの子孫が見付かり、その方がお墓を見に来られた。亡くなったお遍路さんのお墓があることやどこで亡くなっていたのかなど知らなかったようで、とても驚かれていた。長年、お墓の世話をされた方とも約110年ぶりに交流され、地元の広報で記事にする予定である。

6. 実践事例についての評価

(取組についての評価、及びそう評価する理由)

社会教育の関係諸機関との連携を図ることにより、地域教材を見出し、教材化することができた。その結果、地域教材を人権学習(道德の授業)で活用することは、差別や偏見に対してどう対処すべきかを具体的に学ばせるよい手法であることが分かった。また、地域に誇れる人物を取り上げることは、児童たちにとって、今後のよりよい生き方の参考になったと考えられる。

(保護者や地域住民からの反応)

本校の実践発表を市の研修会で報告したところ、参加者の方の感想から「今後も地域資料の活用によって、より効果的な人権学習ができる」「児童にこのような教材を見だし、授業をしていただいてありがたい」などの意見があった。また、この実践報告を聞いた地域の方が広報で取組を紹介した。

子供たちの身近なところで起きた出来事(へんろノートの差別落書き～遍路墓)を教材にして、人権学習に取り組みされた多田小学校の実践報告を聞き、心を打たれた。差別や偏見に対してどう対処すべきかを具体的に学び、真剣に考える子供たちに追いついていきたい。

(現在、実施に当たって課題と感じていること)

課題として、差別事象を取り扱う際に、児童の発達段階に応じた資料の提示の仕方、発問や説明の工夫などが挙げられる。今回の取組では落書きされた差別用語をどのように児童に理解させたらよいのかが課題となった。また、今後、保護者が外国人という場合も想定して、児童への配慮や事後指導も必要と考えている。

その他、今回の授業を行うに当たり、市役所の方や「へんろ小屋」を建設した責任者の方等に話を聞いたり、教材として使用する許可(承諾)を得たりするなど、改めて社会教育と学校教育との連携や学社融合の大切さを感じている。今後、このつながりを継続し、発展させていくことも課題の一つである。